アート・プラットフォーム／アーカイブとしての美術館 福岡アジア美術館

服部浩之、中尾智路

私たちが暮らすアジアにおいて、アジアの美術を中心的に扱う美術館は意外と多くないだろう。福岡市美術館のアジア美術展などの活動を継承し、1999年にアジア美術を専門に扱う美術館として福岡アジア美術館は開館した。約40年に及ぶアジア美術研究の蓄積とコレクション形成は、アジアの美術活動を支える重要なものだ。本インタビューでは、福岡アジア美術館の中尾智路氏に、アート・プラットフォーム、そしてアーカイブとしての美術館という観点から美術館の過去、現在、そして未来についてお話を伺った。

Zoom インタビュー

[Zoomインタビュー]アートプラットフォーム／アーカイブとしての美...

ゲスト：中尾智路（福岡アジア美術館学芸員）
聞き手：服部浩之
収録日：2020年10月15日

インタビューを終えて

中尾智路

福岡にしかできないことは何なのか。40年以上前、福岡市美術館が開館記念展をアメリカ現代美術展からアジア美術展に変更したとき、これが、現在の福岡アジア美術館の基準点にもなったのだと思う。

1980年の「第1回アジア美術展」では、13カ国470人の美術作家を紹介。以後、アジア美術に関わる学芸員たちはアジアの現場に赴き、肌でアジア美術に触れ、日本未紹介の作家や重要な美術動向を紹介しつづけてきた。それは1999年設立の福岡アジア美術館で開催された5回の「福岡アジア美術トリエンナーレ」にも脈々と受け継がれている。

しかし日本・アジア各地で大規模な国際美術展が次々に誕生する2000年代に入り、福岡にしかできないことも、次第にその力点を変化せざるをえなくなっている。 ひとつには、40年におよぶ先駆的な活動の蓄積、つまりは展覧会とともに収蔵されてきた作品や様々なアーカイブに関わるものを整備し、知見をさらに深め、活用できる状態にすること。 また、日本の日常的な関心とアジア美術との交点をより広げて濃密にすることも必要だ。近代の問い直しやマイノリティからの視点を大切にしてきた美術館だが、それに加え、たとえばポップカルチャー、環境問題、グローバル教育といったより日常的な領域への接続が求められるのではないか。レジデンス事業が生みだす地域や人との交流・共感もまた、美術館に活力を与え続けるだろう。

これまでは定期的な現地調査によってアジア各地とのネットワークを築き、展覧会、レジデンス、作品収集というサイクルを生みだしてきた。コロナなどにより、そのサイクルを自力で維持するのが難しくなっているが、私たちは情報を交換し、熱意を共有することで、ネットワークを更新することがいつでも可能だ。

関連ワード

クイーンズランド州立美術館｜現代美術館、シンガポール美術館＆ナショナル・ギャラリー・シンガポール